

むかし、あつたてんがな

むかし、あるところに、おけやさんがいました。ある夏の日、おけやさんは、庭でおけを作っていました。すると、急にたつまきが起こつて、まきあげられて、おけやさんは、天竺てんじくの雲の上まで飛んでいってしまいました。すると、そこに、太鼓たいこを持ったかみなりさまがいました。かみなりさまは、

「おまえはどこから来たんだ」とききました。

「たつまきにまかれて、下の世界せかいから来ました」

「そうか、それはいいところへ来てくれた。長いあいだ日照りひでが続いて、下ではみんなこまっているだろう。これから雨を降ふらせにかかるところだが、相棒あいぼうがなくてこまっていたんだ。ひとつ、手伝てつだいをしてくれ」

「はい」

「おれが太鼓を鳴ならしたら、おまえはこの水ぶくろから、雨の種たねを、ちくちく、ちつとずつまいてくれ。たくさんまくと、大水おおみずになるから気をつけてな」

「はい」

というわけで、おけやさんは、かみなりさまの手伝いをして、雨を降らせました。長い日照り続きなので、下の世界では、みんな喜よろこんでいます。自分の村の上に来たとき、おけやさんは、よそよりたくさん雨を降らしてやろうと思って、水ぶくろから、雨の種をたくさん、どうとまきました。すると、大水になって、村が流ながされそうになりました。

「これは、たいへんなことになった。こまったことをした」と思ったとたん、おけやさんは、雲から足を踏ふみはずして、下に落ちてしまいました。

おけやさんは、まっさかさまに落ちて、お寺の五重塔ごじゅうのとうの先に、帯おびが引つかかってしまいました。どうしても下りることができません。おけやさんは、

「おーい、たすけてくれ」と、大声でさけびました。すると、村じゅうの人が集まってきました。みんなは、相談そうだんをして、めいめいの家から風呂敷ふろしきを持もってきて、それをはぎ合わせて、大きな大きな風呂敷を作りました。そして、その大風呂敷のふちやらすみやらを、みんなで持って、広げていいました。

「ここへ飛びおりろー」

おけやさんは、五重塔のてっぺんから、大きな大きな風呂敷の上に飛びおりて、やつと命が助かりましたとき。
いきがぼーんとさけた

村上郁再話

資料『昔あつたてんがな―宮内昔話集』水沢謙一／長岡史蹟保存会